

ヴィクトリア朝文学と宝塚歌劇——ダンディズム・植民地・スペクタクル

司会：玉井 史絵(同志社大学)
提題者：桐山 恵子(和歌山大学)
西垣 佐理(近畿大学)

一般的に宝塚ファンという極めて特異な集団であり、上演作品は、この世には存在しない男性像を追い求める夢見る少女の欲望を満たす、子供だましのようなものと考えている人も多い。しかし宝塚歌劇団は、女性だけで構成される世界的にも唯一の劇団であり、今年、創立101年目を迎えた歴史と伝統を誇る。

宝塚で上演される作品は、座付き作者が書いたオリジナルの脚本以外に、世界の文学作品を脚色したのも非常に多い。そこで今回は、宝塚で上演されたディケンズ、ワイルド、キャロル、プロンテなどヴィクトリア朝作家の作品、および19世紀英国の社会・文化などを背景にもつ劇作品およびショー作品を紹介する。とくに宝塚男役の美学にもつながるダンディズム、一見、宝塚とは無縁のように思われる植民地がらみの恋愛、英国王室の描き方、さらに妖精、ヴァンパイアなど超自然的存在が登場する作品をとりあげ、ヴィクトリア朝世界が宝塚歌劇においてどのようにスペクタクル化されたかを論じてみたい。

【特別講演】

「希望の巡礼」——ウィリアム・モリスの1880年代

司会：井野瀬 久美恵(甲南大学)
講演者：川端 康雄(日本女子大学)

1880年代のウィリアム・モリス(William Morris, 1834-96)は一方で草創期のイギリスの社会主義運動を牽引し、他方、本業のモリス商会ではテキスタイル部門を主としたデザイン制作で目覚ましい成果を上げた。後者の仕事は1880年代後半に本格化するアーツ・アンド・クラフツ運動の源泉となる。この時期にイギリスで展開された政治と芸術の前衛運動の両面で彼は決定的に重要な役割を果たした。

本講演では1880年代におけるこれらのモリスの活動とその意義を検討することによって80年代文化史の一端を示してみたい。その際、モリスの物語詩『希望の巡礼』(The Pilgrims of Hope)を取り上げる。これはモリスが設立に関わった社会主義同盟の機関紙『コモンウェール』(The Commonweal)に1885年から翌年にかけて随時連載された。1871年のパリ・コミュンに参加したイギリス人青年の愛と戦いを描いたこの物語詩は従来さほど注目されてこなかったが、そこには自伝的な要素も含む闘士の苦悩や希いが田園と都市を舞台に語られていて興味深い。これを頼りに、130年前

●今出川キャンパス「良心館」アセスガイド



※地下鉄「烏丸今出川」駅 北改札右側に「良心館」への直通出口あり

日本ヴィクトリア朝文化研究学会(The Victorian Studies Society of Japan)
事務局：〒658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本 8-9-1 甲南大学文学部 井野瀬久美恵研究室
Tel: 078-431-4341/Fax: 078-435-2578 E-mail: victoria@center.konan-u.ac.jp

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第15回全国大会プログラム

日時：2015年11月21日(土) 10:00～18:00

場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館

〒602-8580 京都市上京区今出川通り烏丸東入

地下鉄烏丸線「今出川」駅から徒歩1分、京阪電車「出町柳」駅から徒歩15分、バス停「烏丸今出川」から徒歩1分

★研究発表 (10:00～12:25)

第1報告 10:00～10:45、第2報告 10:50～11:35、第3報告 11:40～12:25

第1会場(105室)

司会：荒川 裕子(法政大学)

1. Mariana Reimagined: Tennyson and Shakespeare in Millais's *Mariana* (1850-51)
浅野 菜緒子(聖心女子大学 大学院)
2. エドワード・バーン＝ジョーンズの絵画に見るキリスト教イメージ
久保 美枝(京都ノートルダム女子大学 研究助手)
3. 女性労働者がレディに変身する時——アーサー・マンビーの写真におけるラファエル前派のもの
吉本 和弘(県立広島大学)

第2会場(106室)

司会：佐藤 和哉(日本女子大学)

1. *The Lancashire Witches* におけるペンドルの魔女裁判
田邊 久美子(関西外国語大学)
2. 手遣い人形劇「パンチ&ジューディ」について
平野 惟(神戸大学 大学院)
3. 第一回クリスタルパレス・コンテスト(1900年)再考——プラスバンド運動拡大とその後のゆくえ
上宮 真紀(甲南大学 非常勤)

★シンポジウム (101室、13:45～16:30)

神はどこにおられるのか——ヴィクトリア時代知識人にとっての信仰

司会：河村 民部(近畿大学 名誉教授)

パネリスト：有江 大介(横浜国立大学)

松本 哲人(徳島文理大学)

小田川 大典(岡山大学)

★ラウンドテーブル (13:45～16:30)

第1会場(105室)

大阪・神戸とヴィクトリア朝英国——産業と文化の観点から

司会・提題者：松村 昌家(大手前大学 名誉教授)

提題者：濱下 昌宏(神戸女学院大学 名誉教授)

石戸 信也(兵庫県立西宮高等学校)

第2会場(106室)

ヴィクトリア朝文学と宝塚歌劇——ダンディズム・植民地・スペクタクル

司会：玉井 史絵(同志社大学)

提題者：桐山 恵子(和歌山大学)

西垣 佐理(近畿大学)

★特別講演 (101室、16:40～17:40)

「希望の巡礼」——ウィリアム・モリスの1880年代

司会：井野瀬 久美恵(甲南大学)

講演者：川端 康雄(日本女子大学)

★総会 (101室、17:45～18:00)

★懇親会 (18:10～20:00)

会場：室町キャンパス 寒梅館7階 「french restaurant will」

※会員以外の方の参加も歓迎いたします(無料、ただし、懇親会に参加される方は懇親会費をお支払い願います)。

【研究発表】

Mariana Reimagined: Tennyson and Shakespeare in Millais's *Mariana* (1850-51)

浅野 菜緒子(聖心女子大学 大学院)

Mariana (1850-1) by John Everett Millais (1829-96) is one of the three principal works based on Shakespeare's plays during his Pre-Raphaelite period (1848-53): Precisely, it is not directly inspired by a Shakespearean play (*Measure for Measure*) but by a Tennyson poem, "Mariana" (1830), unlike the other two works: *Ferdinand Lured by Ariel* (1848-49) and *Ophelia* (1851-52). Yet as in the other two, Millais was faithful to the original text—in this case of Tennyson—in conceiving his version of Mariana. Simultaneously, we can observe how a distance from the original source by Shakespeare allowed the artist to experiment with his own imagination.

This study concerns various ideas derived from the painting including female sexuality, passage of time, and religion, by particularly focusing on the features such as colours and auditory aspects. Through the whole, it will examine three different images of Mariana by Shakespeare, Tennyson, and Millais respectively, while taking the Victorian views and values into account. Furthermore, this study aims to seek to what extent a Shakespearean source might have influenced Millais's representation via Tennyson's. Overall, it attempts to render insights into the field of the Victorian reception of Shakespeare as well as studies on the literary interests of Pre-Raphaelite Millais.

エドワード・バーン＝ジョーンズの絵画に見るキリスト教イメージ

久保 美枝(京都ノートルダム女子大学 研究助手)

後期ラファエル前派のメンバーとして、またイギリス唯美主義において主要な役割を果たしたエドワード・バーン＝ジョーンズ (Edward Burne-Jones, 1833-98) は、ギリシャ神話を主題とした絵画作品に比べると、聖書を主題化した作品は僅かにしか制作していない。しかし、ギリシャ神話を主題としたバーン＝ジョーンズの絵画空間が、キリスト教絵画モチーフを巧みに使用した、キリスト教化された絵画空間であることを、ファビアン・フレリーツ氏は連作絵画《ペルセウス・シリーズ》において指摘している。発表者は、フレリーツ氏による、バーン＝ジョーンズの絵画空間におけるキリスト教化された世界観についての論考を参照しつつ、他の作品群においても同様に、キリスト教化された絵画空間が構築されていることを論じていく。また、この論考において、キリスト教化された絵画空間における女性像にも焦点をあて、バーン＝ジョーンズの絵画様式を継承したことで知られる女性画家、イーヴリン・ド・モーガン (Evelyn de Morgan, 1855-1919) によって描かれた女性像を比較対象とすることにより、女性像における主体性について、その解釈も試みたい。

女性労働者がレディに変身する時——

アーサー・マンビーの写真におけるラファエル前派のもの

吉本和弘(県立広島大学)

弁護士資格を持った役人であり労働者の教育にも携わった詩人アーサー・マンビーは、下層の女性労働者の生活を詳細に記録し彼らを賛美する詩を書く傍ら、その写真を大量に収集した。そして自ら雑役女中のハナ・カルウィックを路上で見出し秘密の結婚をした。マンビーの写真コレクションは主に炭坑労働者や漁業労働者、軽業師などを被写体としているが、ハナを上流階級のレディに扮装させて撮影した写真がいくつか含まれている。その中の一枚の裏面には、ラファエル前派運動の中心人物、画家ダンテ・ガブリエル・ロセッティに賞賛されたことを喜ぶメモが記されている。この写真と、ロセッティが写真を利用しながら描いたとされる女性像を足がかりにして、発明間もない写真術とラファエル前派の絵画理論との影響関係を確認したうえで、マンビーの女性労働者像とラファエル前派の「宿命の女」のイメージとの間にどのような関係があったのかを考察してみたい。

The Lancashire Witchesにおけるペンドルの魔女裁判

田邊 久美子(関西外国語大学)

歴史小説家William Harrison Ainsworth は、1848年に*The Sunday Times*に*The Lancashire Witches*を連載した。この連載は、1612年に魔法により周囲の住民に危害を加えたとして処刑されたペンドルの魔女と魔女裁判についての実話をもとにしており、翌年、1849年に*The Lancashire Witches: A Romance of Pendle Forest*という題で小説として出版され、彼の最大のヒット作となった。1846年から1847年にかけてAinsworthはランカシャーにあるペンドル・ヒルを取材し、この魔女裁判の書記であったThomas Pottsが1613年に出版した*The Wonderful Discoverie of Witches in the Countie of Lancaster* という書物の公的記述をもとに執筆している。ペンドルの魔女狩りにはプロテスタントによるカトリックの迫害という宗教的要因も絡んでいる。この小説は、魔女裁判の資料としての関心を高める一助となったかもしれないが、Ainsworthの創作による部分も多くみられる。彼の描写を踏まえながら、ヴィクトリア朝における魔女や魔法に対する見解についても考えてみたい。

手遣い人形劇「パンチ&ジューディ」について

平野 惟(神戸大学 大学院)

「パンチ&ジューディ(Punch & Judy)」は、主人公パンチが妻を初めとして警官や絞首刑吏、果ては悪魔をも次々に棒で殴り倒していくな形劇である。初めてイギリスに現れた王政復古期以降に350年以上の歴史を持ち、その即興性ゆえに劇の形式や内容も絶えず移り変わってきたが、現在まで続く上のような典型が完成したのは、ヴィクトリア朝前夜から初期になってのことである。これは社会史の上で「娯楽行動基盤の真空(マーカムソン)」と呼ばれる期間とほぼ重なっている。昔ながらの民衆娯楽が衰退し、大衆娯楽へと移行する過渡期に、この破天荒な劇はかえってあらゆる階級・階層の人気を得ながら完成に達した。ヴィクトリア朝という時代を用意した様々な動きが交わる場に、さながらその混沌の象徴のように立ち現れてくるこの人形劇について、発表ではイギリス民衆娯楽の一例としてのみならず、娯楽史を全体にフィードバックする一つの学問的広場として考えてみたい。

第一回クリスタルパレス・コンテスト(1900年)再考——プラスバンド運動拡大とその後のゆくえ

上宮 真紀(甲南大学 非常勤)

1900年7月21日、長引くボーア戦争への募金を目的に、プラスバンド・コンテストがクリスタルパレスで大々的に行なわれた。このコンテストは、従来、19世紀半ば以降、労働階級を中心とするプラスバンド運動(brass band movement)の「全国化」を象徴するものとして強調されてきた。

しかしながら、このコンテストの様子を伝える全国紙『タイムズ』や『デイリー・メール』などの新聞報道からは、これが「全国規模」の大会でなかったことは明らかである。1900年のクリスタルパレス・コンテストとは何だったのか。なぜこのような「誤解」が生じたのか。

本報告では、このコンテストの具体的な中身を当時の報道記事を中心に検証し、その意味を問直す。そして、そこから新たに浮かび上がる問題点を整理しつつ、20世紀初頭のプラスバンド運動の展開とそこに絡む地域性と階級性の「隙間」を考えてみたい。

【シンポジウム】

神はどこにおられるか——ヴィクトリア時代知識人にとっての信仰

司会：河村 民部(近畿大学 名誉教授)

有江 大介(横浜国立大学)

「J. S. ミルのイエスとJ. H. ニューマンの神」

「J. プリーストリーとT. H. ハクスリー——

松本 哲人(徳島文理大学)

「18世紀後期イングランド啓蒙の遺産とヴィクトリア時代知識人」

小田川 大典(岡山大学)

わが国の西欧文化史・思想史研究の最大の弱点は、ギリシア・ヘレニズムとともにその全体の根底にあるユダヤ・キリスト教に関わる側面の探求です。これは、文学や社会史の分厚い蓄積に比してその分野の蓄積が乏しい、ブリテンのヴィクトリア時代研究についても言えることです。本シンポジウムは、荻野昌利氏による、オクスフォード運動とその主導者J.H. ニューマンについて「ヴィクトリア朝のイギリスの思想文化を通観するためには、宗教界ばかりでなく、イギリス全土を大激震の渦に巻き込み、計り知れないほどの精神的影響を及ぼした」という指摘(『歴史を読む——ヴィクトリア朝の思想と文化』英宝社、2005年、135頁)を“導きの糸”としてその弱点に切り込もうとするものです。科学の時代であると同時に信仰の時代でもあったヴィクトリア期の宗教事情について、限られた領域を対象とするとはいえ、主として知識人が信仰や神について何をどう考え、悩んだのかを、3報告者がそれぞれの視点から検討する予定です。

【ラウンドテーブル】

大阪・神戸とヴィクトリア朝英国——産業と文化の観点から

司会・提題者：松村 昌家(大手前大学 名誉教授)

提題者：濱下 昌宏(神戸女学院大学 名誉教授)

石戸 信也(兵庫県立西宮高等学校)

大阪の開市と神戸の開港の延期交渉の使命を帯びた幕末使節団がロンドンに着いたのは、1862年4月30日の夕刻、クラリッジ・ホテルに旅装を解いた。開けて5月1日は第2回ロンドン万博開幕の日だ。使節団三使ほか4名が、サムライ姿で西欧諸国の貴賓の群れに混じって、その晴れの開会式の舞台上に立った。初めての異文化体験であり、日英文化交流の夜明けでもあった。

使節団三使は、6月5日から7日までの3日間、英国外相ジョン・ラッセルと協議を続け、大阪、神戸の開市開港を向こう5年間、1868年1月1日まで延期することで合意、ロンドン議定書の調印が交わされた。1868年——戊辰年間、明治元年に新大阪・新神戸が誕生したことになるのだ。この後両都市はいかなる産業を起し、いかなる文化を生み出したのか。興味津々たる問題で、ヴィクトリア朝文化研究学会にとっても重要な関心事でなければならないのである。